からしだね

発行・カトリック水巻教会
編集・広報委員会
遠賀郡水巻町頃末南１丁目 35-3
〒807-0025
TEL 093(201)0680 FAX(201)7354
第 319 号
ホームページアドレス　http://www1.com.ne.jp/~mizumaki

明けましておめでとうございます。　マヘル神父

私たちは待降節と降誕祭の間に博士達と共に、イエス様を探す旅をしました。私たち、自分自身が自覚するよりもイエス様は近くにいて、毎日、いろいろな形で話しかけて下さいます。時々、「彼」であると判るのは難しいです。しかし「主」であるに違いない。私たちは「聞き」そして「はい」と言うだけでいいのです。

去年、11、12月2回東京に行きました。82歳の兄の送り、迎えにです。アメリカの姉を訪問する為に、行く時は、羽田から成田に、帰りは成田から羽田までと移動の手伝いにいきました。彼は、足が悪く、歩きにくいので、この旅が無事にできるかどうかとても心配でしたが、私の心配をよそに無事に立派なアメリカ休暇を終えて帰ってきました。

今高知で退職している生活を過ごすことができるのを、感謝しお祈りしなければならないです。姉が８５歳、兄が82歳、私が75歳、妹が68歳ですから、あと何回位この世界で会えるのか、考えさせられます。

毎年正月を迎える度に私達は自然に「歳」について考えますが、今回その東京の旅のお陰で、もっともっと「歳」の意味を感じました。兄の姿に自分の７年後を想像しました。「歳」をとるだけじゃなくて、とればとるほど私たちの力の制限がよく表れてきます。神が私達の人生の支配者であるのをよく感じさせられます。このような時、私に信仰の賜物を頂いたことに感謝いたします。

イエズス様が今まで守ってくださったから、今からもこの支配におまかせすることが安心してできます。

水巻教会に来て、１月で10ヶ月になります。素晴らしい経験でした。主任司祭になって大変忙しかった毎日でしたが、本当に楽しいです。私はこの年(７５歳)で退職を考えましたが、「主」は違う予定のようです。

時々「退職すれば何をする?いつ退職する?それはどういう風にしたら分かる?」と、今はやりのツイッターでつぶやきたいのですが、残念ながら、やり方がわかりません。

2014年はどういう年になるのでしょうか。私は、2014年皆さんの上に神がたくさんの恵みをシャワーのように注いでくださるように祈ります。

今年もどうぞよろしくお願いいたします。

ハーン神父様より・・・・・・２・３面
社会問題に向き合う・・・・・・・３面
大人の日曜学校・・・・・・・４・５面
パウロの歩いた道・・・・・・・・６面
教会学校・・・・・・・・・・・・７面
レプトン会１日黙想会のお誘い・・７面
おしらせ・教会学校・・・・・・・８面

明けましておめでとうございます。昨年は大変お世話になりました。
今年もよろしくお願い申し上げます。

水巻教会の皆さん：

一昨年私は文章で新年の挨拶を送りました。その時、私は半年のサバティカル(刷新のための休暇)を取る計画とその目的を説明しましたが、インドとアメリカのオブレート会の霊性センターで残っている年数をどのように過ごすべきかを考えるためでした。昨年は私の古稀の祝いで、普通であればその年になると引退する年齢を超えているですが、私にとって司祭であることは仕事ではなく召命であり、引退するよりも身を控えて次の世代に責任を譲りながら自分がどのように進むべきかを反省する貴重な時間です。

今年の１月６日で私が伊丹に来て丸８年になります。あっと言う間で信じられないような気がします。本当に幸せな８年間です。更に昨年の９月に、70 歳になり神に感謝するほかにありません。

結論から言えば、一昨年のサバティカルを経て一時的に自分が日本から離れることを決めました。その理由は私が属している日本のオブレート会はたくさんの新司祭の協力者がスリランカ、インド、フィリピン、ブラジルから派遣され日本での宣教ための活動をしています。これから彼らが責任を受け持ち、これから日本の教会のため、更にこの社会に福音宣教の行方の責任をとれるようになるため、一時的に自分が日本から離れることを決めました。伊丹教会はオブレート会の中心的な場所であり、未来の指導者がここにいるべき時期が来たと感じて今年の３月 31 日に伊丹教会の主任の責任を終わることにします。それは私が伊丹から離れたいのではなく、オブレート会と伊丹教会の未来の為にもっと若い力を先頭にしてこの教会が大阪司教区と共に新しい力で進んでいけるようにということです。

伊丹を出てからどこへ行くのか、どのように役に立つのかと考えれば、今の日本のオブレート会の働き手は十分であり、世界中のオブレート会の宣教地では司祭不足の場所が沢山ありますので、ローマの本部に尋ねると是非南アフリカ共和国へ行って手伝って下さいと言われ、神学生の霊性指導とオブレート会が担当している小教区の使命を受け、オブレート会の日本地区評議会の許可をいただいて、３年間行くことになりました。

その任務が終わった後は日本に戻り、出来れば協力者として若い世代を手伝うつもりです。

ある意味では今までの日本の生活はあまりに楽で、安定して、ぼけてしまいそうな感じでした。だから新しいところで刺激を受けて、自分を新たにして帰ってくるようにとも祈っています。

まだ元気がある今のうちに何かをしないとそのチャンスを逃してしまう、という気がするのです。どうか皆さま、私のために祈ってください。

宣教に行くときには皆さまから頂いた数多くの思い出、霊的な賜物と恵みをもってアフリカの兄弟姉妹と分かち合い、またそちらで頂く恵み、体験をもって皆と一緒に分かち合うつもりで行って来ます。皆さまの御理解と応援を願

って、今年こそ皆さんと共に神に向かって「新しい歌を歌おう」と思います。宜しくお願いします。

改めて新年おめでとうございます。今年中皆さんの上に神様の御顔の光が照らされますようにお祈り申し上げます。

ハーン・フランシス・ヨセフより

社会問題に向き合うカトリック教会の基本姿勢

Q16：正義と平和協議会、難民移住移動者委員会、部落差別人権委員会の委員長は、「教育基本法改定案に反対する」との声明を発表しました。こういった人によって見解の分かれる問題に対し、司教協議会の委員会の長が、その肩書きをもって「反対」の意見表明をすることは適切なのですか。慎重な議論を求めるといった論調にすべきではないでしょうか？

Ａ：もちろん、ことがらによっては賛否を明確にせず､「慎重な議論を」と呼びかけたり、問題解決のための「大切な視点」を投げかけるにとどめる声明もあります。しかし、起こっている（あるいは、起ころうとしている）問題が、人間の尊厳や平和に反する重大な問題を含んでいるような場合には、教会として明確な態度をとる必要もあります。その場合は、個人の考えとしてではなく、司教団、あるいは司教協議会の一つの委員会としての態度表明であるために、むしろ肩書きがその意味を表します。

当時提出された教育基本法改定案には、平和と人権を柱とするこれまでの教育理念を崩していくほどの重要な問題が含まれていました。もともと教育基本法は、「教育勅語」を基本にした戦前の教育に対する反省によってできたもので、平和憲法の精神を強く受け継ぎ、「戦争をしない平和な国家をつくるためには教育はどうあるべきか」をきちんと明文化した法律といえます。個人の尊厳と普遍的な平和は福音の原点でもありますが、このことがまさに憲法で謳われ、教育基本法を通して実践されていました。ところが、ここにあえて「公共の精神」や「愛国心」などを盛り込み強調していくことで、時に国家によって個人の尊厳や教育の独立性が脅かされる可能性が出てくる危険性など、改定案は多くの問題を含んでいました。教育の問題は国のあり方にかかわる重要な問題です。ですから、諸委員会委員長の連名で声明を発表しました。

もちろん、具体的な問題であるだけに、信徒の間でも賛否両論があることは分かります。また、こうした具体的な問題に対する声明は教義のようなレベルではないので、最終的には自分自身の信仰に基づいて判断する自由が信徒にはあります。ですが、司教協議会の委員会としての社会に対する公の発言であるならばそれを尊重し、教会のメンバーとして、関心をもって問題の所在を学んでほしいと思います。そして、声明の背後にある福音の視点を踏まえながら、教会の中で積極的に学習会や話し合いの場がもたれることが望まれます。

大人の日曜学校（１０月２０日、ミサ終了後実施）の報告

先月号に引き続き、「信仰の証し」を掲載します。

幼 児 洗 礼 の 恵 み の 中 で　　松尾 降(遠賀地区)

私は幼児洗礼です。

これまでの体験を振り返って、これが神様との出会いかな。と思ったこと、主と共に聖霊の導きがあると感じたことを話していこうと思います。

振り返って思い出すものは、嫌な思い出ばかりを最初は思い出しました。小中学生の頃は、教会へ行くことが本当に嫌で仕方ありませんでした。

土曜日はお昼ご飯を食べたら、教会の土曜学校、日曜日はミサへ行くスケジュールを毎週、繰り返していました。

小中学生の頃のミサは、退屈な時間でした。特に、「説教」は１時間の気分でした。

退屈な時間は、手遊びや話をすれば、後ろか横に座っているリーダーに注意されるし。何が楽しくて、大人は教会へ行くのか？また、どうして嫌だと言っているのに、ミサに連れて行かれるのか？いつもそう思っていました。そんな中で思い出したのが、１０歳の夏休みに「CYG」のキャンプで九重の山へ登った時のことです。

順調にいけば頂上へあと３０～４０分で到着する頃だったと思います。霧が出始めたため、縦１列になって前の人のリュックを掴んで歩くように。また、笛を吹くからその音に注意して歩くよう伝言がありました。

そして霧がどんどん濃くなり、３０㎝先も見えないほどの状況になりました。霧の中の笛の音は、神様や聖霊の導きが具体的なものとして届けられたのだと今は思います。

小中学生の頃は、教会へ行くことにとても抵抗がありましたが、自ら進んでミサへ行こうと思うようになったのは高校生からです。

学校がプロテスタントでしたので、毎朝、３０分程度の礼拝と日曜礼拝、時には音楽礼拝もありました。礼拝での説教を聞いているうちに、カトリックの良さ、特に聖体拝領があることが、ミサに行く喜びに変わっていきました。

また、2003 年にインドで開催された ASIAN　YOUTH　DAY（AYD）をきっかけに、2005 年、ドイツのケルン、2011 年、スペインのマドリードの World Youth Day（WYD）に参加し、教会へ行くことの喜びや楽しみをより一層、見出すことができたと思います。

WYD とは、カトリック信者中心に世界の青年が集う巡礼です。世界各地から年齢は様々な、高校生から 40 歳位の青年を中心に、多い時では 100 万人前後の信者が、一つの場所に集い、信仰をより深めたり再確認をしていく巡礼です。

私は「巡礼」といえば

・ただひたすら歩き続けること

・辛い、苦しいことがあるけど、最後には喜びが訪れる

という暗いものだと思っていました。

実際に参加したWYDの巡礼は、踊って歌っておいしいものを食べて、楽しく過ごしながら、神と自分の対話を深めるものでした。

2003年インドでの体験は、神様との出会いを確信し、聖霊の導きをはっきりと感じた体験となりました。

８月１５日、インドは独立記念日で祝日にあたります。その日が出国日でした。予定の飛行機が欠航していると聞いていました。空港に行けば何とかなるということでしたが、いくら説明しても相手にされず、途方に暮れていました。しばらくすると、偶然なのか必然なのか、日本人を見つけ共に目的地へ行くことができました。この旅は「神に感謝！！」の一言に尽きるものとなりました。

2005年ドイツ、ケルンのWYD巡礼も神様との出会いや導きを実感するものとなりました。ある自由時間の折り、道を一本間違え、教会を見つけて入りました。ここでミサがあるか尋ねたところ「ある」「ない」と両方の返事が返ってきました。しばらくして、主聖堂とは別の場所でミサがあると言われました。それは香部屋の２階でした。

道を間違わなければ、ドイツの教会で香部屋に入ることもなかっただろうと思います。これも聖霊の導きがあったのだと思います。

2011年、WYDスペインに行く前に、フランスにあるテゼ共同体に約１週間滞在しました。ここはエキュメニカル（キリスト教一致）に根差した共同体で、教派を超えて全ての人に開かれた祈りの場です。単純素朴な生活の中で、短い歌と黙想による祈りの中で過ごします。

エキュメニカルといっても、ここテゼに集う人々がすべて信者という訳ではありません。しかし、神を信じる、信じないということよりも、もっと根本的な何か、奉仕の精神や信頼する心を学んだところでした。テゼでは全てが、奉仕によって成り立っていました。朝の食事の準備から始まり、配膳、食器洗い、掃除や後片づけまで。すべてが喜びをもって、自発的奉仕によるものでした。私が参加した時は、約８千人の人が滞在していたそうです。

食事の時間はさすがに、にぎやかであちこちで笑い声や元気に遊ぶ子供たちの声もしますが、夜、テゼ共同体のブラザーたちと共に過ごす祈りの時間は、言葉ではなく、心が真の一致をする空間のように思えました。

・皆が集まるところに主もおられる　　・いつも主は私たちの内に住んでおられる。

巡礼に行くたびに実感する言葉です。

パウロの歩いた道　　　№1

私が持っている大切な叔母の形見に「図説　聖書の世界」三部作の第三巻「パウロの歩いた道」という本が手元にあります。

この本が発行されてから35年過ぎていますが、現代社会の変転に比べて、このような歴史のある事項については一向に古くなりません。むしろその時代に聖書を解説した著者の息遣いや序文を書いている「故山本七平さん」の迫力ある文章に心が引き込まれます。

この本や、大阪教区の和田神父様の本などを参考書にしながら、私が歩いて体験した、パウロが歩いた道について書いてみたいと思います。

山本七平さんは序文の冒頭に、**「パウロと回心」**というテーマで次のように書いています。

『パウロ、不思議な人である。不思議な人とは奇妙な言い方かも知れない。しかし、虚心、聖書を読めば、その第一印象は不思議な人の一言につきる。そしてもし彼に会えば、その第一印象もまた不思議な人であったであろう。パウロの言葉を黙って聞いていた初対面の総督フェストは、なぜ突然大声で叫んだのか。・・「パウロよ、おまえは気が狂っている。博学が、おまえを狂わせているのだ」と。ローマの総督ともあろう者が、一囚人の前でこのような叫びをあげるとは。しかしこの叫びは不思議ではない、それは、あり得ない不思議を見た者の叫びである。』

常識人であったローマ総督フェストが目にしたパウロの印象がそうであったのです。パウロは全ての人の常識を超える人であったのかもしれません。

歩く、馬に乗る、船に乗る、しか交通の手段がなかった2000年前に、パウロが長い距離を歩いたのは本当の話です。そしてその道を地図だけでなく、地平線まで続く道を実際に見ると、現代の私たちには信仰という背景があっても、とてもできないことと思わされます。

初めてパウロが歩いた道を見たのは、パウロの故郷の町タルソからアナトリア高原へ上がった時でした。この町から厳しい急な坂を登りきった一番上が「キリキアの関門」と言われる峠でした。ここは4000m級の大山脈が続くタウロス山脈の地中海側で一か所だけ切れている所です。この谷間を抜けるとトルコの西半分の中央にあるアナトリア高原に出ます。

紀元前３世紀にキリキアの関門を高原側から抜けたのがマケドニアのアレキサンダー大王でした。ガイドブックには「我ここを通過せり」という彼の言葉が書いてある碑文があると書いてありましたが、その場所は工事中で見当たりませんでした。

私がこの高原を通ったのは六月初旬で、アナトリア高原は麦の取り入れの時期でした。高原は地平線の彼方まで続く麦秋で見事でした。とにかく広大な地平線の彼方まで続く麦畑で、その彼方にポツンと農家が見えました。一軒の栽培面積は日本の農家の何倍でしょうか。

私たちはバスを留めてもらいましたが、麦畑の規模の大きさに感心するとともに、パウロはこの道を何日かかって歩いたのだろうという話になりました。

この高原については、後からも述べることにします。　　　(岩本)

教会学校のページ

１１月２４日

クリスマスカードを書きました。

１２月８日

〇ミサ後、すぐに聖堂の入口の外で募金活動をしました。

〇ゆるしの秘跡を受けました。

〇クリスマスカードを作りました。

カードのあて名書き

〇リコーダーの練習をしました。

１２月２２日

〇ミサ後、降誕前夜祭のミサの入場の練習をしました。

〇信徒会館で、クリスマス会をしました。

神父さまと一緒に英語の歌も歌いました。

一日黙想会のお誘い

テーマ：「アジアの宗教の中の私たちキリスト教」

―アジアには特有の仏教、ヒンズー教、神道などがあります、

アジアの人々の感性に訴える方法で福音宣教するためにー

指導司祭：ジュード神父（古賀教会主任、オブレート会、スリランカ出身）

日　時　：2014 年 1 月 18 日（土）10：00～15：00

場　所　：カトリック水巻教会

費　用　：500 円（弁当代）

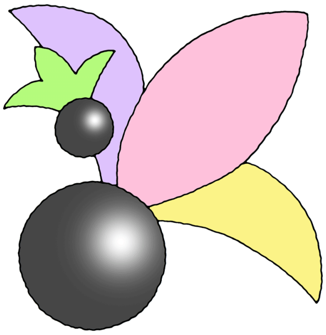
プログラム

10:00～12:00　講話１

12:00～13:00　昼食

13:00～14:30　講話２

14:30～15:00　ミサ



参加を希望される方は、聖堂後ろの掲示板に、名前を書かれてください。

世話係：ペルーの貧しい子どもを支えるレプトン会　岩本ナセ（遠賀地区）

★特別献金★

〇１２月１日　宣教地司祭育成献金

３５，９００円

ご協力ありがとうございました。

★子ども達の募金★

〇１２月８日

４１，７８２円

ご協力ありがとうございました。

★フィリピン台風救援募金★

６０，１７０円

集まったお金は、カリタスジャパンへ送りました。

募金は引き続き行っておりますので、ご協力をお願いします。

★街頭募金★

今回も街頭募金は、参加者を募って行われました。前日までの寒さが少し和らいだ、太陽の光が緩やかに差す日になりました。

場所は今年も水巻のグランモールで行いました。２０人ぐらいの方が募金活動に参加してくれました。

募金に協力してくれる方もたくさんいらっしゃって、多くの募金が集まりました。

３５，３５４円

なお、このお金は、日本フィリピン友好協会北九州に送り、フィリピン台風の救援に役立てて頂きます。

★黙想会の知らせ(レプトン会)★

日　時：　１月１８日(土)

１０：00～１５：00

場　所：　カトリック水巻教会

費　用：　500 円（弁当代）

指導司祭：ジュード神父(古賀教会)

参加希望される方は、聖堂後ろの掲示板に名前を記入してください。

なお、テーマ、プログラムなど詳しいことは、７面に載せていますので、そちらをご覧ください。

★１月１日　新年ミサ★

午前１０時から

ミサ中に成人のお祝いを、ミサ後に車の祝福を行います。また、ミサ後に新年祝賀パーティーも行います。

★新連載について★

今月号から新しく「パウロの歩いた道」の連載を始めます。私(岩本)の経験と様々な資料を参考にしながら、キリスト教の基礎を作った、偉大なパウロの足跡を皆さんに伝えられるよう、書いてみます。

前回までの連載「聖書への案内」同様、皆さんに読んで頂けると幸いです。